



明治大学  
学長  
大六野 耕作

## 「個」を磨き、ともに持続可能な社会を創る

### 時代や為政者に流されない、独立した個人を作る

明治大学は、1881年、岸本辰雄、宮城浩蔵、矢代操によって創立された明治法律学校が始まりです。3人は鳥取、山形、福井から藩の貢進(選抜)生として、明法寮(のちの司法省法学校)に学び、その後、岸本と宮城はフランス留学で当時のフランス自由主義に大きな影響を受けました。

建学の精神は「権利自由」「独立自治」。初代校長の岸本は、1903年に明治大学へ改称した際の演説「明治大学の主義」の中で、「官僚が国を動かすために法律の知識を持つのは当然。しかし、それに流されない独立した個人を作る……」ことの重要性を強調しました。「個」の確立を通じて、社会を支える一人の市民を育てるという精神です。つまり、エリートを作るというよりは、時代に流されず、為政者に支配されない個人を作りたいというのが、明治大学の最初からの理念です。これは現在の理念「個を強くする大学」に継承されています。

### 「個」を強くする、国際化と新学部

私は、政治経済学部長に就任した2008年頃からグローバル化に取り組みました。この時の思いは、「卒業生が社会に出て、会社で責任あるポストに就く頃、明治出身者が時代を席捲してほしい。ここから20年が勝負」というものでした。5つの国際化GP採択をはじめ、この10年間の取り組みで、年間355名(2009年度)にすぎなかった留学経験者は、2019年度には2326名と6.5倍になり、留学生も874名から2320名に増えました。現在、英米の10大学とサマーセッションの協定を結んでいますが、カリフォルニア大学バークレー校(UCB)のサマーセッションと他大学に先駆けて協定を結んだことが功を奏し、現在、UC4校(バークレー、ロサンゼルス、デービス、アーバイン校)のサマーセッション派遣数では、国公立も含め日本の大学の中ではトップクラスの実績を上げています(2011～19年度の累計参加者は200名以上)。

学生の就職先も変わってきました。「就職マーケットは日本だけじゃない」と、海外の大学・大学院へ留学し、海外の企業、日本の商社や外資系企業、OECD等の国際機関に就職する学生も増えています。アカデミッ

クな分野でも、この3年間でフルブライト奨学生(Ph.D.プログラム)が3人出ているといえ、驚かれるかもしれません。3人ともアメリカで業績を積んで、将来は本学の研究を支えたいというのです。この3人の思いは、正に本学の創立者3人の思いに通じるものがあります。

国際化とは、英語ができることでも留学することでもなく、ある種の“触媒”だというのが持論です。海外に出ることで学生の意識に化学反応が起き、皮剥けた人間になる。これが重要なのです。サマーセッションに行った学生のGPAデータを見ると、面白いことに気づきます。英語とGPAとの間には全くといってよいほど相関はなく、本学でのGPAが良ければ、サマーセッションでの成績もいい。しっかり考えている学生はどこでも通用する。もちろん英語ができれば、彼らの学びはさらに豊かになります。

日本は近代化の過程で、当時の先端知識や技術を全てローカライズ(日本語化)できた世界でも稀な国です。この結果、優れたモノや技術で勝てれば外国語は必要ないという意識も生まれました。これが、英語コンプレックスが生まれた一因ですが、今はそういうわけにもいきません。グローバル化した世界では、多様な文化・価値観・歴史的背景を持つ人々とコミュニケーションを図り信頼を勝ち取ることが欠かせません。2008年に国際日本学部を創設した理由はここにありました。2013年には、社会(世界)の様々な現象をデータサイエンスの観点から解析する総合数理学部を作り、ビッグデータの処理やAIの技術を駆使して現代の問題解決を図る人材の育成を始めています。

### グランドデザイン2030

明治大学は2031年に創立150周年という大きな節目を迎えます。その時、本学はどのような大学になっているのでしょうか。

周知のように、経済活動のグローバル化は歴史上まれに見る豊かさをもたらす一方で、エネルギー問題、地球温暖化、富の不平等、グローバルな感染症拡大等、国や地域を超えた深刻な問題を生み出しています。富の不平等は「異論の存在を許さない」権威主義の台頭につながり、感染症は人類の生存そのものに対する深刻な

脅威になりつつあります。いま、大学はこうした人間の生存と尊厳を脅かす問題に向き合い、これを解決する技術・システム・思想・知恵を生み出すという重大な役割を担っています。「権利自由」「独立自治」を建学の精神とする本学は「人間が人間として生きるに値する平和で持続可能な社会(世界)」の創出を目指す研究・教育拠点でなければならないと、私は思います。こうした認識から、昨年12月に教学長期ビジョン「グランドデザイン2030」を発表しました。基本コンセプトは、「前へ―『個』を磨き、ともに持続可能な社会を創る―」で、これは本学の建学の精神である「権利自由」「独立自治」の現代的表現に他なりません。

これまでの長期ビジョンと異なるのは、数値目標を明らかにしたことです。まず、1都3県以外からの出身者を、現在の29%から40%に。国際化では、留学生比率を13%(4000名)に、留学経験者比率を50%に。現在、8つのダブルディグリー・プログラムがありますが、今年度には政治経済学部とタマサート大学との間で「双方向型ダブルディグリー」も始まります。

研究では、受入研究費を15.8億円から50億円に。論文の国際共著率を30%にまでに引き上げます。現在、本学には13の研究所がありますが、その一つである「バイオリソース研究国際インスティテュート」は、国内外の大学、研究機関、企業を取り込んだ国際的研究組織となっています。ここでは、生理学・解剖学的にヒトに近いブタを利用し、ヒトの臓器再生を行う最先端の研究が行われています。

教育では、対面型授業とオンライン型授業のベストミックスを考えながら、「eラーニング科目」数を500科目まで引き上げます。私が学長として目指しているのは、世界の大学と本学との融合です。世界中の大学から、講義や教員をクロス・アポイントメント制度を通じて明治大学に取り込み、世界標準の教育を実現したいと考えています。

創立者の理念や創立時の歴史背景が、その大学の背骨を形成することは間違いありません。「明治大学の学生はオープンで気取らず、しかし仕事をやらせればすごいことを成し遂げる」といわれる学生を育てたい。明治大学はこれからも、時代に挑戦し果敢に「前へ！」進みます。



(撮影 平山 諭)

だいろくの・こうさく

1954年、福岡県生まれ。1977年明治大学法学部卒業。同大学院政治経済学研究科博士後期課程単位修得退学。専門は比較政治論。政治経済学部長や副学長(国際交流担当)等 数多くの要職を歴任。また、デューク大学、ノースイースタン大学、ラオス国立大学でも教鞭をとるなど、国際的にも活躍。明治大学体育会ラグビー部の部長を長年務めた。